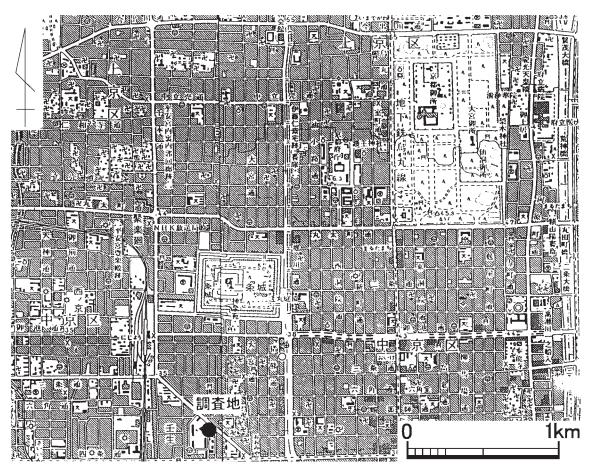
# 2.平成21·22年度平安京跡左京四条一坊 六·十一町、壬生大路発掘調査報告

#### 1. はじめに

この調査は、平成21年度および平成22年度京都府中京警察署(仮称)庁舎建設工事に係る平安京 跡発掘調査として、京都府警察本部の依頼を受けて実施した。調査地は、京都市中京区壬生坊城 町48番地16に位置する。平安京の条坊復原によると左京四条一坊六・十一町、壬生大路に想定さ れる。周辺では多くの調査が実施され、弥生時代~中世にかけての多くの遺構・遺物が検出され ている。

今回の調査地は、明治45年に開業、昭和47年1月に廃止された京都市電の壬生車庫が北側に、 南側にはそれに伴う旧車庫煉瓦建物、昭和37年開業の京都市交通局の建物が存在していた地点に あたる。

平安京左京四条一坊六・十一町でのこれまでの調査例としては、1975年に市電壬生車庫跡地(左京四条一坊五・六・七町)で発掘調査が行われている。この調査では、六町域で平安時代から鎌



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都西北部・東北部)

倉時代の四条坊門小路の南北両側溝、平安時代前・中期末の井戸跡、中期から後期にかけての建 物跡が検出されている。

今回の報告は、平成21年度と平成22年度の2か年にわたって実施した発掘調査の報告である。 平成21年度は平安京造営以後の遺構・遺物が削平されることなく存在するかどうかを確認する ことを目的として、庁舎建設予定地の一画に2か所の小規模なトレンチ $(1\cdot 2$ トレンチ)を設け て実施した。平成22年度は平成21年度の調査成果を踏まえて、平成21年度の1トレンチを拡張す るとともに、新たに2か所のトレンチ $(3\cdot 4$ トレンチ)を設定して発掘調査を実施した。

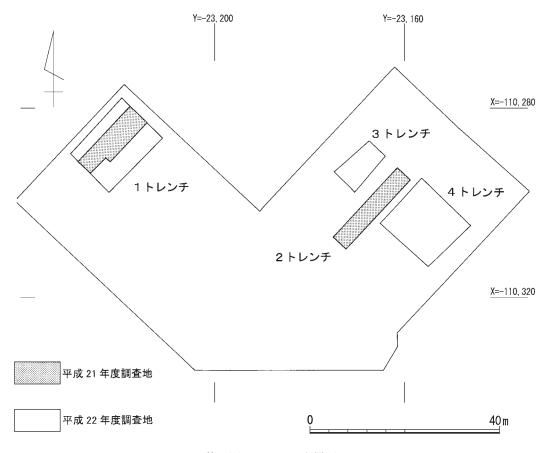
現地調査には、京都府教育委員会、京都市教育委員会、(財)京都市埋蔵文化財研究所をはじめ とする関係諸機関のご協力をいただいた。現地調査および整理作業には多くの方々の参加を得た。 記して感謝したい。本調査報告は、出土遺物の土器類を当調査研究センター次席総括調査員伊野 近富が、その他は増田孝彦が執筆した。

現地調查責任者 調查第2課長 肥後弘幸

調 查 担 当 者 調查第2課主幹調查第3係長事務取扱 石井清司 同主任調查員 増田孝彦

調 查 場 所 京都市中京区壬生坊城町48番地16

現地調査期間 (平成21年度)平成21年11月30日~12月18日 (平成22年度)平成22年4月19日~6月24日



第2図 トレンチ配置図

# 調 **查 面 積** (平成21年度)150㎡ (平成22年度)350㎡

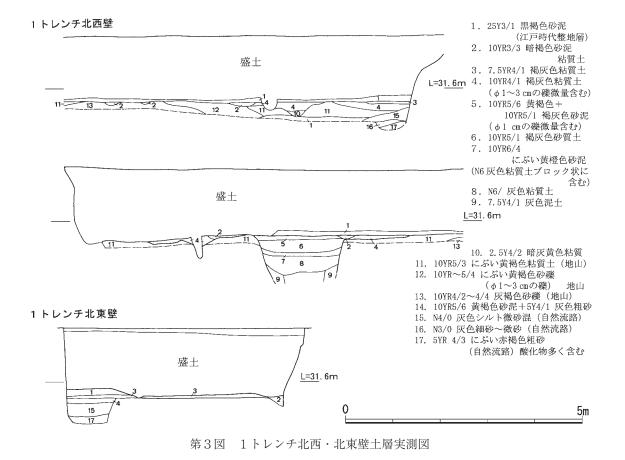
#### 2. 調査概要

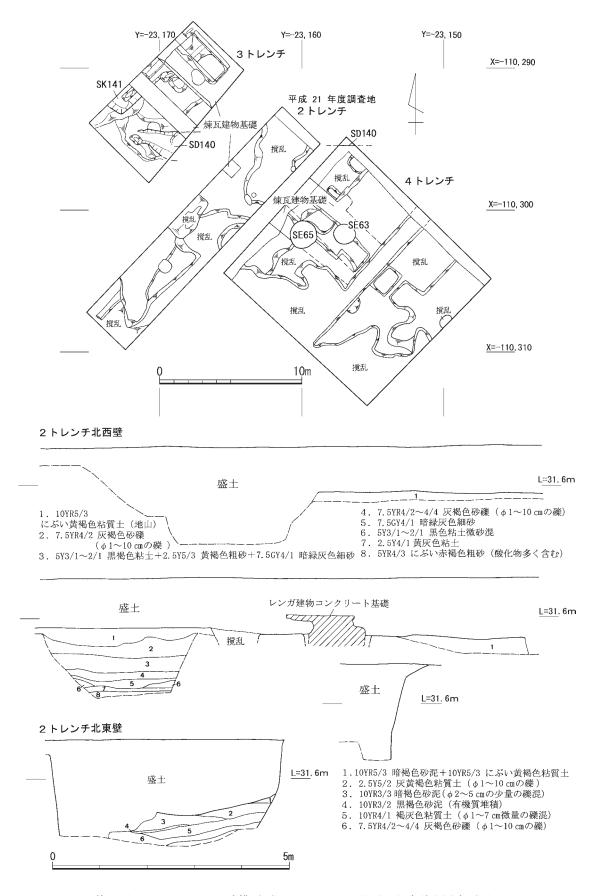
#### 1)平成21年度調査(第2図)

平成21年度の調査は、庁舎建設予定地の西側と東側の2か所に設定して実施した(1・2トレンチ)。1トレンチは左京四条一坊六町域、2トレンチは壬生大路の路面及びその東側溝、一部左京四条一坊十一町域にあたる。

1トレンチ(第3・6図、図版第1~3) 土層の堆積状況は、地表下1.3mまでは近・現代の盛土、明治時代以降の遺構の攪乱、近・現代の盛土が堆積しており、その下層で厚さ10~15cmの江戸時代の整地層(1層)を確認した。江戸時代の整地層直下は、基盤層である黄褐色粘質土(11層)の遺構検出面となり、平安京造営以後の真南北を意識した溝などを検出した。これらの遺構からは、中世を中心とした土師器・瓦器・陶磁器の細片が出土した。江戸時代に整地を受けたため、遺構は削平され浅いものとなっていた。検出した主な遺構は、中世と考えられる真東西方向の溝6条・真南北方向の溝15条、井戸跡1基、土坑5基、柱穴15か所がある。これらの遺構からは9世紀末、12世紀末~13世紀初頭、13世紀後半を中心とした遺物が出土した。

なお、検出した遺構の詳細については、平成22年度調査の項にまとめた。





第4図 2~4トレンチ遺構平面図、2トレンチ北西・北東壁土層実測図

2トレンチ(第4図、図版第3) 1トレンチと同様、地表下1.0mまでは近・現代の盛土が堆積し、明治時代以降の攪乱を多く受けていた。そのため、盛土直下が基盤層である黄褐色粘質土(1層)となっており、壬生大路東側溝・路面跡など明確な遺構はなく、あるいは壬生大路の路面部分にあたるためか、柱穴や井戸跡もなかった。なお、トレンチ北東角付近にわずかに残る江戸時代の整地層より平安時代以降、鎌倉時代を中心とした土師器・瓦・陶磁器の小片が出土した。

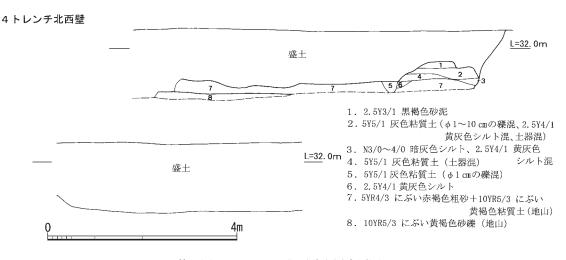
#### 2)平成22年度調査(第4図)

平成21年度の調査結果を踏まえて、平安京造営以後の良好な遺構が検出された1トレンチを中心に北西・南東側にトレンチを拡張して発掘調査を実施するとともに、壬生大路に関連した遺構が存在している可能性を考えて、2トレンチの北西側に3トレンチ、南東側に4トレンチを新たに設定して発掘調査を実施した。

1トレンチ拡張部(第6図、図版第4) 平成21年度に実施した1トレンチを拡張したものであり、土層の堆積状況は、平成21年度の1トレンチと同様である。平成22年度の調査では新たに東西溝8条、南北溝12条、土坑3基、柱穴23か所、井戸跡1基を検出した。明治時代以降の攪乱土及びその直下の包含層中からは、古墳時代後期の須恵器・土師器、平安時代の須恵器・土師器・緑釉陶器・瓦片、中世以降の土師器・瓦器・陶磁器類の破片が出土した。

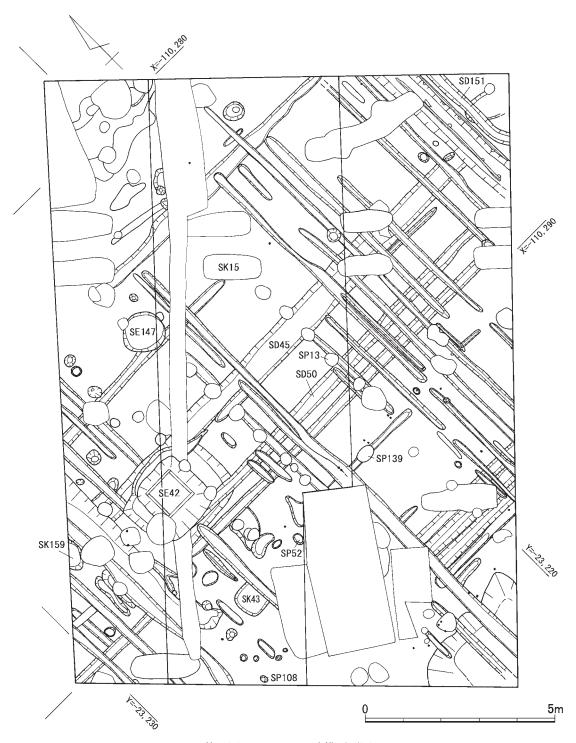
3トレンチ(第4・8図、図版第6) 2トレンチの北側に設定したトレンチで、2トレンチ同様の堆積状況をなし、地表下約1.0mまでは近・現代の盛土とともに、明治時代以降の攪乱を受けていた。遺構検出面である黄褐色粘質土(6層)の基盤層は確認できたが、後世の攪乱により当初予想された壬生大路の側溝・路面跡などの遺構は検出できなかった。包含層中からは古墳時代後期の須恵器・土師器、平安時代の須恵器・土師器・緑釉陶器・瓦片、中世以降の土師器・瓦器・陶磁器類の破片が出土した。

4トレンチ(第4・5図、図版第6) 土層は3トレンチと同様の堆積状況をなし、地表下約1.0mまでは近・現代の盛土と明治時代以降の攪乱を受けていた。遺構検出面である黄褐色粘質土(7層)の基盤層は確認したが、後世の攪乱により当初予想された壬生大路の側溝・路面跡など



第5図 4トレンチ北西壁土層実測図

の遺構は検出できなかった。検出された遺構は、3トレンチの溝SD140の延長部の溝南側の肩部と考えられるものと、近代以降の井戸2基を検出した。包含層中からは、古墳時代後期の須恵器・土師器、平安時代の須恵器・土師器・緑釉陶器・瓦片、中世以降の土師器・瓦器・陶磁器類の破片が出土した。



第6図 1トレンチ遺構平面図

#### 3. 検出遺構

1)1トレンチ(第6図、図版第4)

井戸跡S E 42 (第7図、図版第5) トレンチ中央付近西側で検出したもので、一辺約1.7mの 方形の掘形をなし、検出面からの深さ約2mを測る。井戸の底部分には、一本の柱材を中央で二分割し、さらにそれを横に半切して転用した0.9m四方の井戸枠が残存していた。縦板等の井戸部材の大半は抜き取られており、井戸の中位付近で抜きとりの際に残されたと考えられる縦板が少量残存していた。これにより三枚組接方形縦板組横桟どめの井戸であることが明らかとなった。底面の標高は29.2mで、検出面から約1.5m付近が自然流路の砂礫層であるため湧水が著しく、井戸壁面が一部崩落した状態であった。埋土は青灰色泥土(礫混じり)で、土師器、陶磁器、瓦、木製品(題籤軸・箸・曲げ物の底など)が出土した。出土遺物から12世紀末~13世紀初頭と考えられる。

井戸跡SE147(第7図、図版第5) 井戸跡SE42の北東側で検出した。円形の掘形をなし、直径約1m、検出面からの深さ2.1mを測る。井戸枠は検出されなかった。底面の標高は29.2mで、検出面より1m付近で砂礫層となり湧水が著しく、井戸の壁が崩落したためか、下部へ行くほどに袋状に広がっていた。埋土中からは、土師器、須恵器、瓦器、常滑甕、東播系甕・鉢、中国製青磁壺・白磁壺などとともに、木製品(箸・曲げ物の底など)、金銅製玉などが出土した。出土遺物は12世紀後半を中心としたものである。

溝SD45 トレンチ中央部で検出した東西方向の溝で、検出長16.2m、幅0.65~0.9m、深さ7~8cmを測る。埋土は暗褐色砂泥粘質土で、細片化した土師器・須恵器・瓦器片が出土した。

そのほかの小溝 東西・南北方向の小溝を多数検出した。小溝だけでみた場合、遺構の切り合い関係から東西方向の小溝が先行する。この小溝は井戸SE42・147と切り合い関係を有し、井戸は東西方向の溝に後出し、南北方向の溝に先行する。東西方向の小溝は幅0.2~0.4m、深さ3~7cmを測る。南北方向の小溝は幅0.2~0.3m、深さ4~5cmを測り、最大のものでは検出長14.2m、幅0.45m、深さ4~5cmを測る。

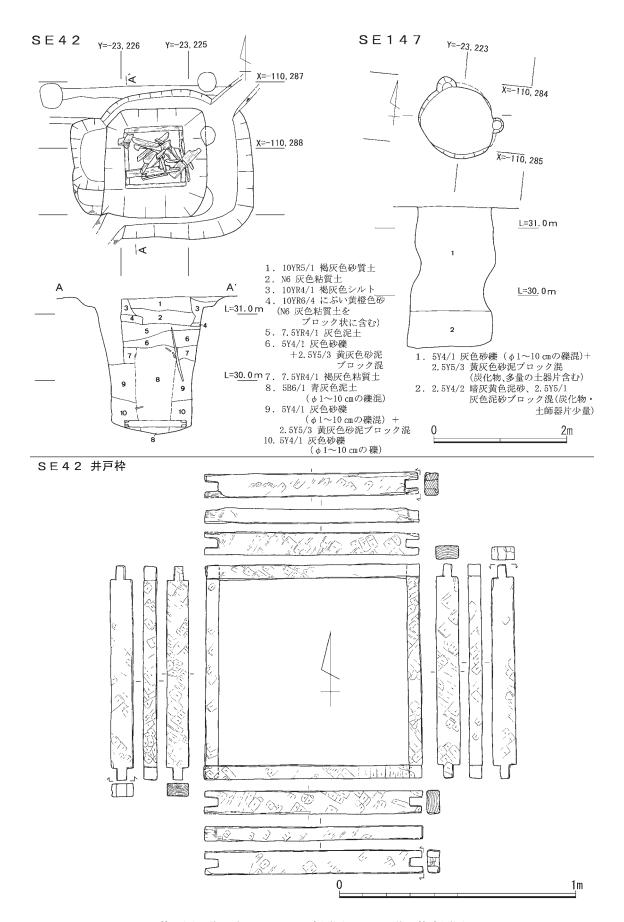
土坑SK43 SE42の南側に位置し、一辺0.8m×0.9mの方形の掘形を有し、深さ28.7cmを測る。北東隅の底面より曲げ物の底板が出土した。

柱穴SP52(図版第3) 中央部やや南西側にあり、長径0.35m、短径0.25m、深さ5cmを測る。 根石代わりに破損した二種類の平瓦片を底面に敷いている。

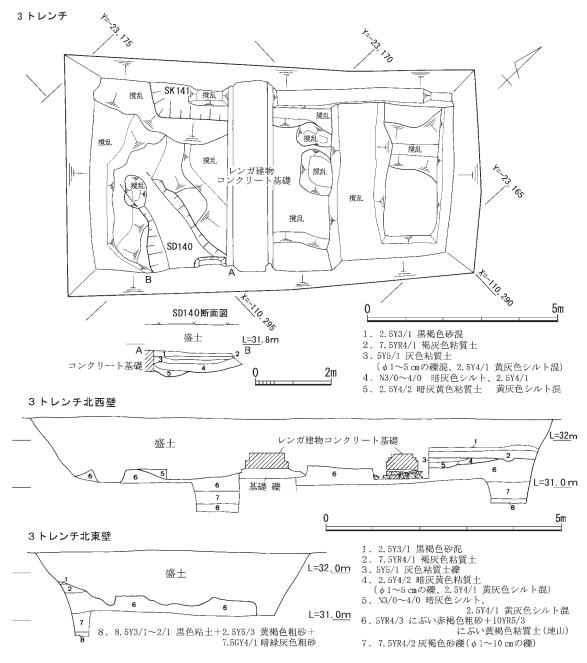
#### 2) 3トレンチ(第8図、図版第6)

検出された遺構として、トレンチ西端において推定壬生大路路面上を東西に走る溝1条(SD 140)を検出した。

溝SD140(図版第7) トレンチの南端にあり、最大幅約2m、最小幅約1m、深さ0.2mで、長さ3mにわたり検出した。浅いレンズ状の断面をなし、細片化した土師器皿が出土した。溝SD140の東延長部は2トレンチにかかる位置にあるが、明治時代以降の攪乱により削平されたようで検出されなかった。2トレンチの東に隣接する4トレンチでは溝SD140の南肩の一部が検



第7図 井戸跡SE42·147実測図、SE42井戸枠実測図



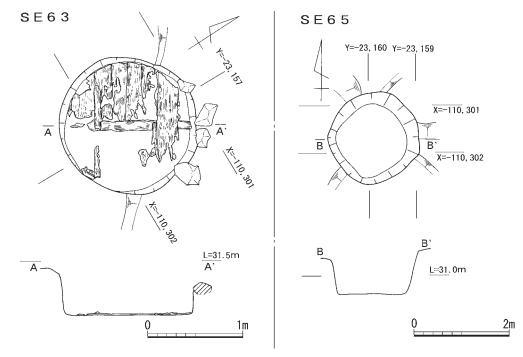
第8図 3トレンチ遺構平面図、3トレンチ北西・北東壁土層実測図

出できた。出土遺物から13世紀後半と考えられる。なお、トレンチ東壁に面した溝底で、長径 0.9m、深さ0.2mの柱穴状の掘り込みが検出したが、遺物が出土しなかったため時期は不明である。

土坑SK141 溝SD140の北側、トレンチ北西壁で検出したもので、大半がトレンチ外になる。 検出長2m、同幅0.9m、深さ0.2mを測る。埋土は一層からなり、細片化した土師器皿が出土した。 出土遺物から鎌倉時代前期と考えられる。

#### 3)4トレンチ(第4図、図版第6)

井戸跡SE63(第9図、図版第7) トレンチ中央部よりやや北西壁寄りで検出した。市電壬 生車庫時代の煉瓦建物基礎により削平を受ける。円形の掘形を有し、直径1.45~1.5m、深さ0.5 mの規模を測る。底面の標高は30.6mである。底面に薄い底板が見られ、埋土中より樽の側板片



第9回 井戸跡SE63·65実測図

が出土しており、樽をそのまま井戸枠としていたと考えられる。底板の直径は約1.35mで掘形底 面の直径と樽の直径はほとんど同じで、きっちりとはめ込まれていたようである。埋土中より陶 磁器の破片が出土している。出土遺物から江戸時代後期と考えられる。

井戸跡SE65(第9図) 井戸跡SE63の西側2mのところで検出した。円形の掘形を有し、直径1.85m、深さ0.94mを測る。底面の標高は30.6mである。井戸側板等は存在しなかった。井戸跡SE63同様、埋土中より陶磁器の破片が出土している。出土遺物から江戸時代後期と考えられる。

溝SD140(図版第7) 3トレンチで検出した溝の延長部と考えられるもので、溝南側の肩部の一部が確認できた。検出長1.1m、深さ0.15mを測る。埋土中より鎌倉時代前期と考えられる土師器皿が出土した。

(増田孝彦)

#### 4. 出土遺物(第10~18図、図版第8~10)

遺物は整理箱15箱分出土した。種類は土師器、須恵器、瓦器、黒色土器、国産陶磁器(灰釉陶器・緑釉陶器・常滑焼き・唐津焼きなど)、瓦、輸入陶磁器(中国製白磁・青磁・褐釉陶器)、石製品、木製品などである。

#### 1 トレンチ井戸S E 42出土遺物(第10・15図、図版第10)

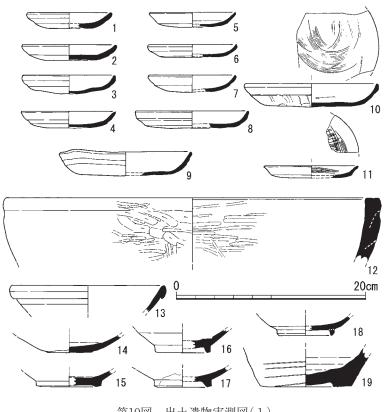
 $1\sim19\cdot88\sim94$ は井戸SE42から出土した。 $1\sim10$ は土師器皿である。 $1\sim7$ は小皿、 $8\sim10$ は中皿である。 $2\sim4\cdot6\cdot8\cdot9$ は口縁部を二段ナデで調整している。1は口径8.8cm、器高 1.6cmである。色調は淡褐色である。口縁端部をヨコナデし、体部上半もヨコナデしている。9

は口径14.0cm、器高2.4cmで ある。色調は淡褐色である。 口縁端部をヨコナデし、面取 りしている。10は内側に板状 のものでハケを施している。 この技法や大きさから12世紀 中葉から後葉と考えられる。

11は瓦器皿である。口径 9.8cm、器高1.2cmである。色 調は黒色である。

12は瓦質の盤である。内面 にミガキを施す。口径 39.6cm、現存高6cmである。

13~17・19は中国製白磁椀 である。13は口縁部が肥厚し た、いわゆる玉縁状口縁のも ので、15はその底部である。



第10図 出土遺物実測図(1)

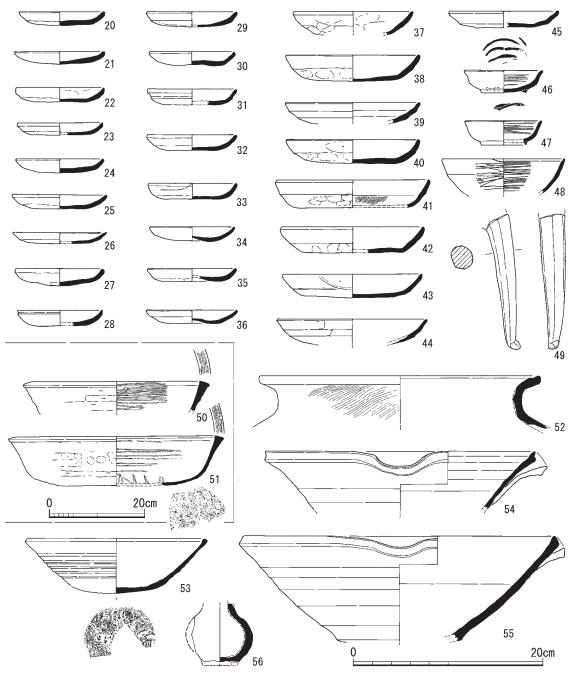
大宰府分類の白磁椀Ⅳ類に相当する。14は体部の内外面とも施釉しており、釉色はうすい灰緑色 である。底部外面は露胎である。破片全面が焼けており、橙褐色と灰色で、煤が付着している。 16・17は高い高台をもつもので、大宰府分類の白磁椀V類に相当する。内面は施釉しているもの の、外面は露胎である。19は中国越州窯青磁水注の底部である。59と同一個体である。外面に緑 灰色の釉を施す。内面にも同様の釉が認められる。底部内面には煤が付着している。畳付けは露 胎である。削り出し高台である。内外面ともロクロで成形している。断面は橙褐色と灰白色であ る。13~17・19は12世紀末から13世紀初めに相当する。

18は無釉だが、器形から判断すれば灰釉陶器である。ただし、現存部分に釉はない。くちばし 状の高台をもつもので、K90(黒笹90号窯式)段階に相当する。9世紀末である。

88~94は木製品で、88は題籤軸で完形品である。全長33.3cm、題籤部分は長さ5.8cm、幅2 cm、厚さ0.45cm。両面に墨書が認められるが一面のみ判読できた。『保延六年(1140)返抄』とあ り、返抄は律令制における領収書であるが、反対面が判読できないため何を指すものかは不明で ある。

89は不明木製品で片側に2段にわたり抉りがつく。全長23.8cm、幅0.9cm。90は棒状のもので、 全長18.3cmを測る。幅広の先端部分中央には径3mmの穴、基部にはホゾが認められることから、 何らかの本体に差し込まれていたようである。

91は箸である。92はしゃもじで、取っ手先端を欠損するが、残存長14.9cmを測る。93は全長7 cm、幅0.5cmの丸い棒状のものである。



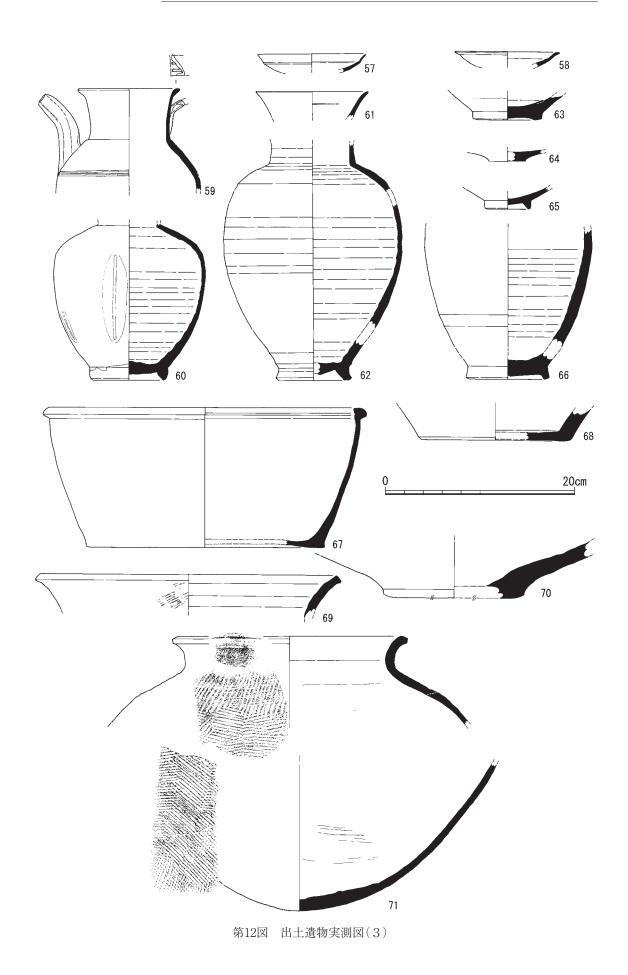
第11図 出土遺物実測図(2)

94は曲物底板で約1/2が残存。側面に3か所木釘が残る。材はスギで、柾目である。

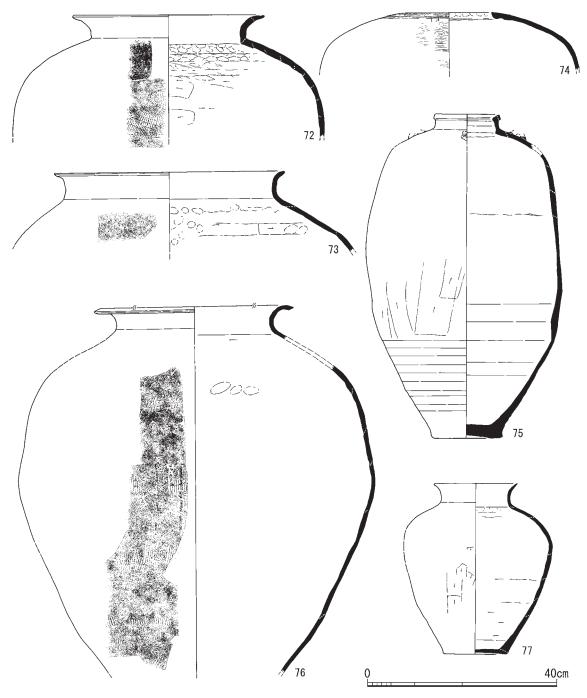
#### 1トレンチ井戸SE147出土遺物(第11~15図、図版第8~10)

 $20\sim82\cdot83\sim87\cdot95\cdot96$ は井戸SE147から出土した。 $20\sim45$ は土師器皿である。 $20\sim36$ は小皿、 $37\sim45$ は中皿である。20は口径8.8cm、器高1.2cmである。色調は淡褐色である。口縁部は一段ナデで調整している。 $23\cdot30$ などは端部を強くヨコナデし、面取り技法を施している。SE147出土の土師器皿は、一段ナデのものが主体で、二段ナデのものが少なく、SE42出土品より新しく、12世紀後葉から13世紀はじめのものが中心である。

64は白色土器の杯である。底部は糸切りである。



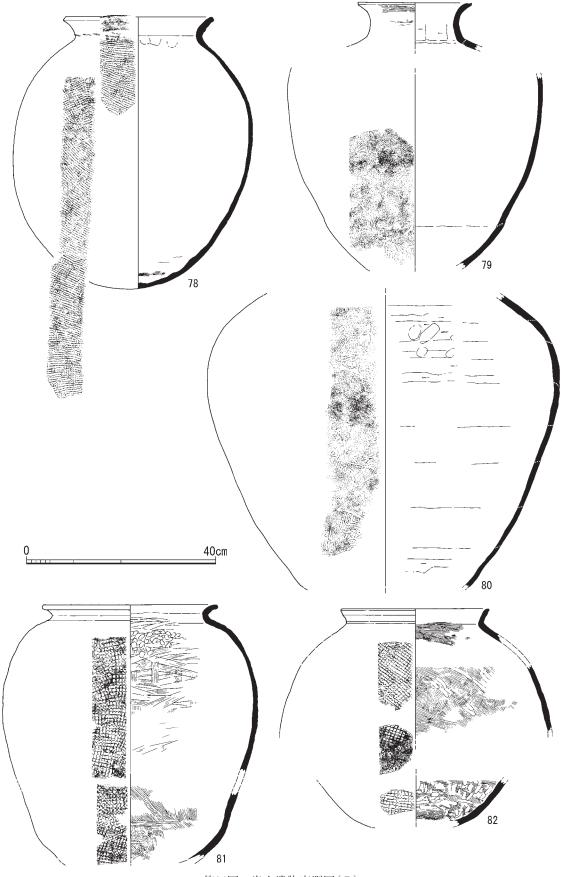
-23-



第13図 出土遺物実測図(4)

 $46\sim51$ は瓦器である。 $46\cdot47$ は小杯、48は椀である。49は鼎(かなえ)の脚、 $50\cdot51$ は盤である。46は口径8.0cm、器高2.4cmである。色調は黒色である。内面にミガキを施す。48は口径12.8cm、器高4.0cmである。色調は黒色である。内外面ともミガキを施している。口縁部内側は少し窪ませて段があり、大和型の瓦器椀である。12世紀代である。 $50\cdot51$ は内面にミガキを施し、外面の上半分はユビオサエである。

52~55、69~71・78~82は須恵器である。52は甕で、口径29.6cm、残存高は5.6cmである。東播系、おそらく魚住産と思われる。53~55は片口の鉢である。53は口径18.8cm、器高6.0cmである。

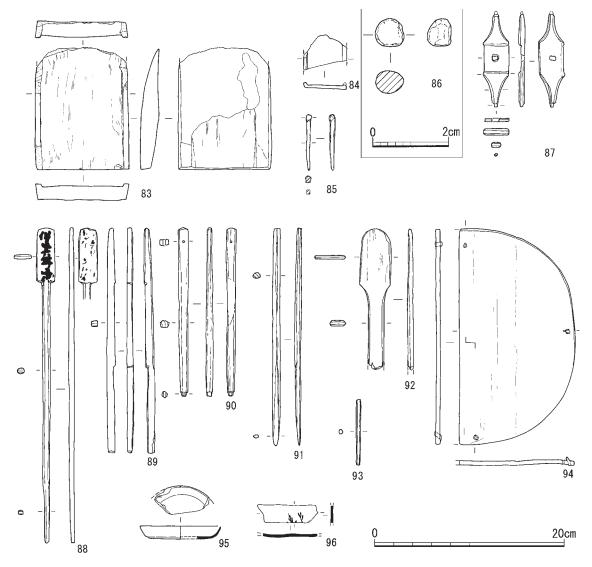


第14図 出土遺物実測図(5)

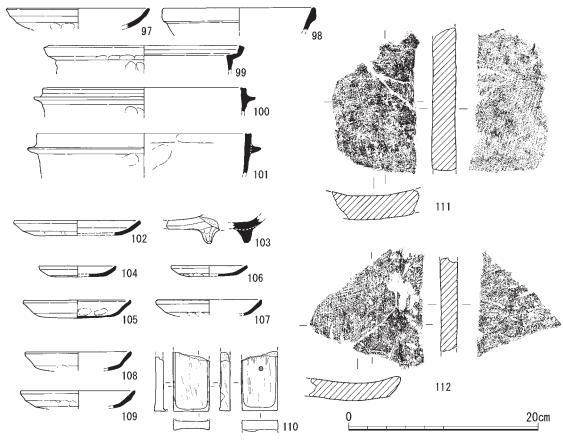
54は口径24.4cm、器高6.0cmである。色調は青灰色である。69~71・78~82は須恵器甕である。70は底部である。内面には自然釉が遺存している。71は「く」の字状の単純口縁で、体部外面には格子タタキを施している。底部は丸底である。口径22cmである。78~82は卵形の体部である。78は口径30.4cm、器高58.4cmである。体部外面には平行タタキを施している。81は口縁部の立ち上がりが短いもので、さらに、体部外面には格子タタキを施している。78~82は12世紀後半を中心としたものである。

56は瓦質壺である。丸胴のもので、体部下半はヘラケズリを施す。胴径6.8cm、残存高は6.4cmである。高台がとれており、元は仏花瓶であったと思われる。

57~63・65~68・75は中国製陶磁器である。57・58は白磁皿である。57は口径11.2cm、残存高は1.6cmである。体部中位は屈折している。59は青磁水注である。口径10.4cm、残存高10.8cmである。広口で、口縁端部は小さく外反している。注ぎ口は先が細くなる円筒形で、ヘラにより面取りしている。把手は細い中実の粘土紐を使用している。体部上半に2条の沈線を施している。



第15図 出土遺物実測図(6)



第16図 出土遺物実測図(7)

色調は灰色の混じった茶色であり、その特徴から中国越州窯青磁の新しい段階のものと考えられる。60・62・66は白磁壺である。いずれも口縁部は欠損している。内外面ともロクロナデである。底部はいずれも削り出し高台である。60は胴径16cm、残存高16.6cm、体部中位の現存部に縦方向の窪みを3か所(完形ならば4か所)施し、いわゆる瓜形の胴部をしている。61は白磁椀である。63は白磁椀第Ⅳ類である。65は白磁椀である。67は黄釉盤である。口径32cm、器高14.8cmである。内外面とも施釉しており、釉色は灰緑色である。口縁部は外側に肥厚したものである。体部の内外面は施釉しているが、底部外面のみ露胎で、砂を含んだ粗い胎土である。68は白磁壺の底部である。外面は灰緑色の釉で、断面は灰色である。ロクロナデで成形している。75は中国製褐釉壺である。外面は茶褐色の釉がかかる。ヨコナデで調整している。内面はナデで調整している。下半には上から垂れた茶褐色釉がかかっている。口径12.8cm、復元高68.8cmである。底部は平底で、長胴の体部に小さな口縁部が付くものである。口縁端部は外側に肥厚している。この形状から12世紀のものと考えられる。

72~74・76・77は常滑甕である。いずれも口縁部は単純な「L」の字状である。体部外面にタタキを施す。72は口径38.4cmである。口縁端部は尖り、「逆ハ」の字状に引き出されており、この形態から常滑編年の1b-2期に相当し、12世紀第2~3四半期のものと考えられる。76の口縁部は大きく屈曲しており、常滑編年では2期に相当し、12世紀第3四半期である。73は一段階新しく3期に相当し、12世紀第4四半期である。77は小型で、口径16.8cm、器高36cmである。

体部外面上半は茶色、下半は灰色である。

83・84は石製の硯である。83は大形品で幅9.8cm、残存長12.95cm。84は小形品で幅4.6cm、残存長3.65cmを測る。85は鉄釘で頭部を巻頭形に巻き込むものである。全長5.9cmを測る。86は金銅製品が溶解して玉状に固まったと思われるもので、表面に部分的に金色が残る。87は糸巻きで全長9.8cm。材はスギで、板目である。95は漆器の薄手の皿と考えられる。全体に黒漆が塗られ、不明文様部分には赤漆が塗られる。96は漆器不明製品で、板状の部分品で96、同様、黒漆が塗られ松葉状の文様は赤漆が塗られる。

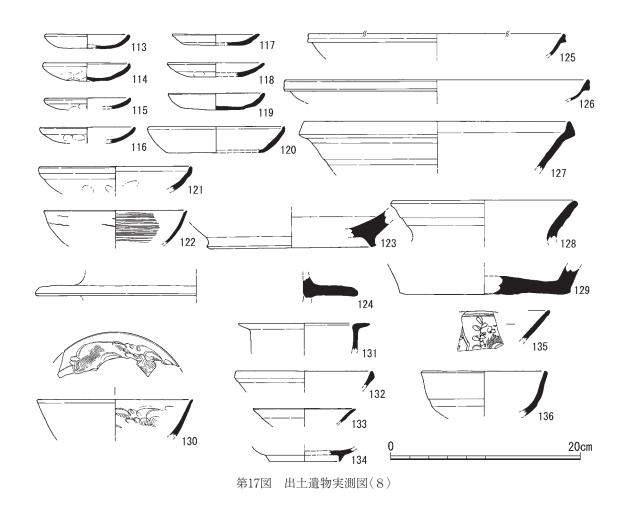
**1トレンチSP52出土遺物**(第16図) 111・112はSP52から出土した瓦である。いずれも内面には布目、外面には縄タタキが施されている。

#### 3トレンチSK141出土遺物(第16図)

102・103は3トレンチSK141から出土した。102は土師器皿である。口縁端部は面取りしている。口縁部は一段ナデである。13世紀前半である。103は瓦質鉢の脚である。

#### 3トレンチSD140出土遺物(第16図)

104~107は3トレンチSD140から出土した。すべて、土師器皿である。104・106は小皿、105・107は中皿である。104は口径7.8cm、器高1.0cmである。色調は淡褐色である。口縁端部は面取りしている。口縁部は一段ナデである。105は口径11.2cm、器高2.0cm、色調は淡褐色である。



-28-

これらは13世紀後半のものである。

#### 1トレンチ包含層出土遺物(第16・17図、図版第8)

97~101・110・113~136は包含層から出土した。97は土師器皿である。口縁部は二段ナデであ

る。12世紀末から13世紀初めである。98 は中国製白磁椀である。口縁部は玉縁状である。大宰府分類の白磁椀IV類である。時期は12世紀後半から13世紀初めのものである。99は瓦器鍋である。口縁部は「く」の字に屈折している。13世紀のものである。100・101は瓦器羽釜である。箱型の体部に小さな鍔を付けている。13~14世紀前半の所産である。

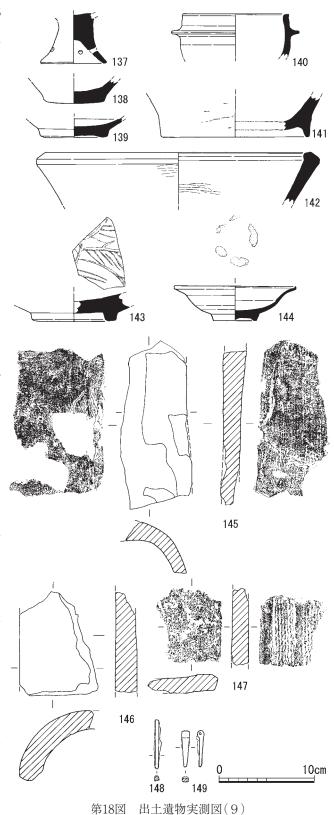
110はSK63付近で出土した、石製の 硯である。長方形で、幅4cm、現存長 6.8cmである。

113~121は土師器皿である。120は深 皿で14世紀代である。

122は瓦器椀である。内面に密なミガキを施す。外面は一部のみミガキを施す。 口縁端部内面に窪みがある。大和型である。124は瓦器羽釜である。128は瓦質甕である。色調は灰色である。

123は東海地方の瓷器系の鉢である。いわゆる山茶碗と同じ胎土で、砂粒を含む。125~127は東播系の須恵器鉢である。口縁部を肥厚させたもので、125・126は小さく肥厚させていることから12世紀後半から13世紀前半のものである。127は口縁部を分厚く肥厚させていることから13世紀後半から14世紀前半のものである。129は須恵器甕の底部である。

130は中国龍泉窯青磁椀である。内面 にヘラで雲竜文を描いている。131は中 国龍泉窯青磁香炉である。内外面とも施 釉している。釉は明るい緑灰色である。



132は中国製白磁椀である。玉縁状口縁で、大宰府分類のIV類である。133は白磁皿である。口縁端部内面は釉をかきとっており、いわゆる口禿げの皿である。釉は灰白色である。134は中国製白磁皿である。口縁部が端反りになるタイプである。釉は灰白色である。畳付けは露胎である。16世紀代である。

135は中国製赤絵磁器である。内面に花紋を施している。もともとは赤色であったが、ほとんど色はくすんで黒色に変化している。外面の釉は青灰色である。136は唐津椀である。

#### 2・3トレンチ包含層及び攪乱層出土遺物(第18図)

137は土師器高杯である。底部に円形の透かしを施す。138は黒色をした壺底部である。139は中国製白磁椀底部である。大宰府分類のIV類である。140は須恵器羽釜である。141は東海地方の瓷器系の鉢の底部である。内面は使用により磨耗している。142は備前鉢である。口径28cm、残存高5.2cmである。143は中国製青白磁椀である。内面にヘラによる刻花を施す。全面施釉であるが、畳付けのみ露胎である。144は唐津鉢である。内面には5か所に目跡がある。16世紀前半のものである。145~147は瓦である。内面に布目、外面に縄タタキを施す。178・149は鉄釘である。(伊野近富・増田孝彦)

#### 5.まとめ

今回の調査地は、明治時代の市電車庫、京都市交通局の建物跡によって攪乱を受けている部分も存在したが、北側の1トレンチで中世の溝・井戸跡などを検出した。また、南側の2トレンチでは壬生大路の路面にあたるためか、建物跡・井戸跡などは存在せず、道路側溝も攪乱により検出できなかったが、3トレンチでは鎌倉時代前期の土坑SK141、路面を東西に横切る鎌倉時代後期の溝SD140が検出された。4トレンチにおいてもその延長部分と考えられる溝の南肩部分が検出された。

平安時代後期の左京四条一坊六町域は白河法皇の近臣であった内蔵頭藤原国明の大邸宅があった場所とされており、井戸跡S E 147より出土した中国製陶磁器との関連が注目される。また平安時代後期の1137~1185年には邸宅周辺で大火が発生しており、邸宅内の一部が火災を受けた可能性もある。井戸内より出土した貯蔵具である多数の甕類に火を受けた痕跡が見られることから、この大火との関係も注目される。これよりやや古い井戸跡S E 42から出土した題籤軸『保延六年(1140)返抄』など、当該地の歴史的背景を考える上で重要な資料となるものである。

(増田孝彦)

- 注 1 伊藤 潔·近藤章子「平安京左京四条一坊十三町跡」(『京都市埋蔵文化財研究所調査報告2006-10』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所) 2006
  - 大立目 一「平安京左京四条一坊十二・十三町跡」(『京都市埋蔵文化財研究所調査報告2006-33』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所)2007
- 注 2 古代学協会·古代学研究所『平安京堤要』角川書店 1994 金田章裕『平安京一京都 都市図と都市構造』京都大学学術出版会 2007

# 図 版



(1)調査前全景(南東から)



(2)平成21年度1トレンチ 市電軌道検出状況(南から)



(3) 1 トレンチ全景(南西から)



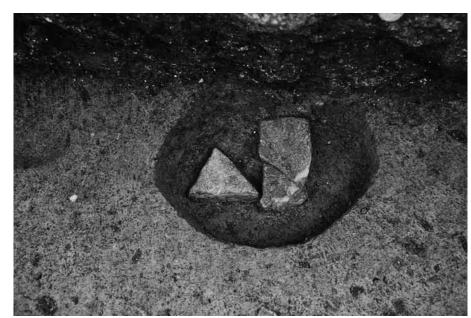
(1)平成21年度1トレンチ全景 (北東から)



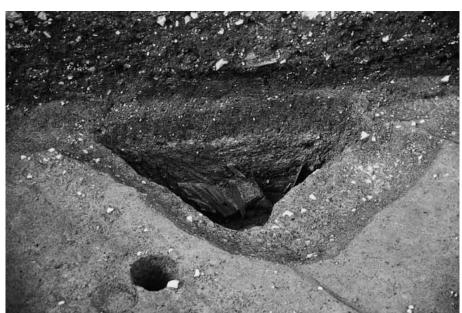
(2)1トレンチ北東壁断面 (南西から)



(3)1トレンチ北西壁断面部分 (南東から)



(1) 1 トレンチ柱穴 S P 52 遺物出土状況(北西から)



(2)1トレンチ井戸跡SE42 検出状況 (南東から)



(3) 2 トレンチ全景(北東から)



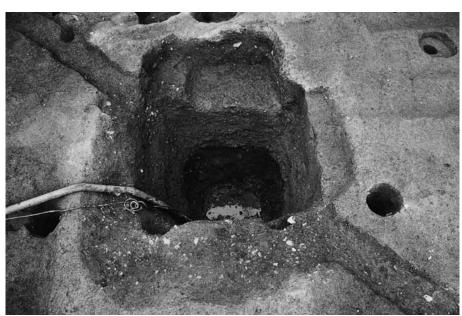
(1)1トレンチ全景(南西から)



(2) 1 トレンチ全景(南から)



(1)1トレンチ井戸跡SE42井戸枠 検出状況(南から)



(2) 1 トレンチ井戸跡 S E 42 完掘状況(東から)



(3)1トレンチ井戸跡SE147 完掘状況(南西から)



(1)3トレンチ全景(南東から)



(2)4トレンチ全景(北西から)



(1) 3トレンチ溝SD140断面 (北西から)



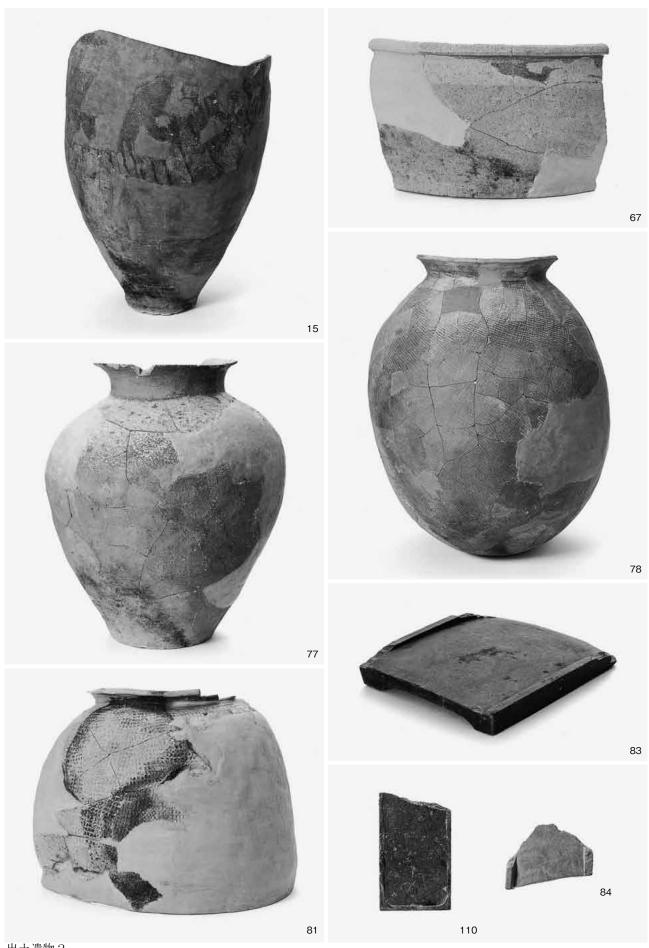
(2)4トレンチ北西壁断面(東から)



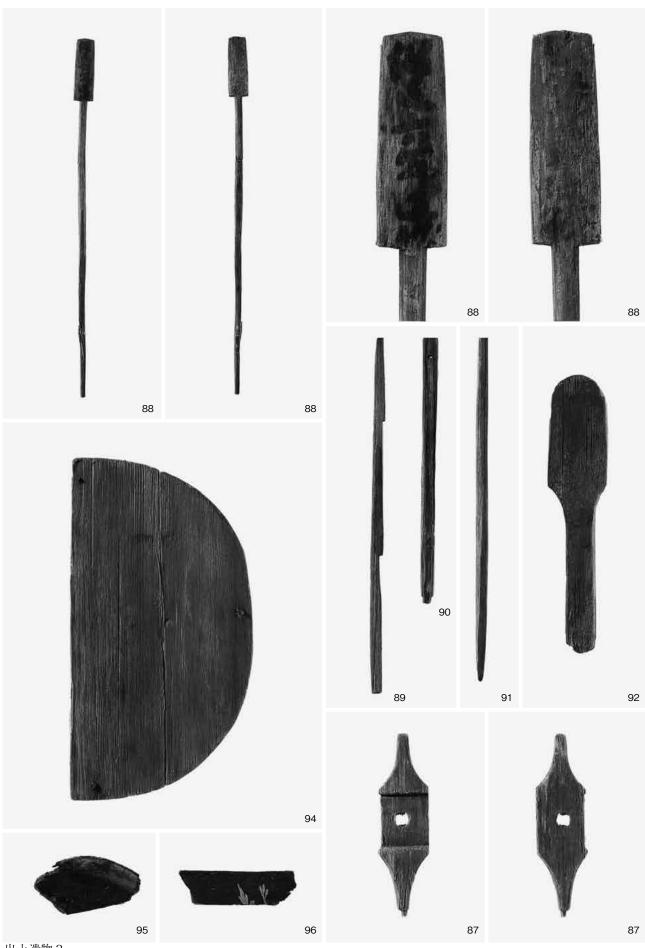
(3) 4 トレンチ井戸跡 S E 63 (南東から)



出土遺物1



出土遺物 2



出土遺物3